

「ミュージアム」がオープンして1年、私の思ったこと

理事長 天岸 祥光

私たちが目指してきた自然史博物館は、静岡県立「ふじのくに地球環境史ミュージアム」という名称で昨年3月26日にオープンして1年が経ちました。

私たちNPOはミュージアムの主役6名の研究員（学芸員）、県職員（教員2名を含む）の方々への強力なサポーターとしての位置づけをしっかりと引き継いだ上で、この新ミュージアムを全面的にバックアップすべく、この1年努力して参りました。

NPOがミュージアムの中心に入り込んだ形の県立博物館は全国的に珍しく、また、それ故にこのミュージアムの最大の特徴でもあります。（オープンを記念して新しいミュージアムの意義について川勝知事と安田館長の対談が静岡新聞2面にわたり大々的に載りましたが、この最大の特徴については一切語られなかつたのには、いささか驚きましたが…）

30万点の資料を（県からの委託を受けて）10年以上にわたり収集・保存・管理してきたNPO職員と新しく来られた6人の研究員を含む県職員の方々との間の良好な関係をいかに構築していくかが、このミュージアムが世に誇りうるものになるかどうかの最大のカギを握っていることは言うまでもありません。

県の職員ではない、また無償奉仕のボランティア団体でもないNPOのメンバーが、このミュージアムの中核においてバックヤードを中心に仕事をやっているのですから、考えてみても県職員、研究員の皆さんと協力体制を構築するにはお互い知恵が必要です。ミュージアムのバイブルである「基本構想」に従った展示やキャラバン隊、ミニ博物館などの構想を研究員が練り、NPOがそれに沿った資料を提供しサポートする、基本的にはこういうことです。しかし、NPOからも構想に積極的に発言し、また研究員の方々も積極的にバックヤードの仕事に参加していただく、この理想的な姿に近づくためには普段のコミュニケーションが重要です。

そんな中で、最近NPO、県職員、ミュー

ジアムのサポーター、サービススタッフ、インタープリターなどの皆さんと一緒に、ミュージアムの裏山にあった旧南校の散策路の復旧作業を行ってほぼ完成したことは、大変な快挾でした（NPO機関紙56号の三宅さんの記事をご覧ください）。本来の我がミュージアムのあるべき協力姿勢を示してくれたと思っています。この「生物多様性のみち」に子供たちが勇んでやってくる豊かなミュージアム園を創造していきたいものです。

NPO独自の変化を一つ紹介します。国の科学研究費や財団の研究費を単独で獲得する若いNPOの職員たちが出てきたことです。NPOの定款の中に「資料、標本の収集・保管・研究」と書かれてはいますが、独立した研究そのものを任務に入れているわけではありません。NPOが請け負っているミュージアム本来の仕事がもちろん優先ですが、その仕事の傍ら、研究につながる仕事ができ始めていることは望外の喜びです。NPOの研究予算はゼロですから、与えられた仕事の傍らこういった外部資金を獲得しながら自分の研究にも時間を割くのは並大抵のことではありません。これはミュージアムに関係した研究だけではなく、これはミュージアムに関係ない個人的な研究だから時間外にやれ、等と初めから分けるのはばかげています。許される範囲で興味を持った研究を大いにやっていただくことは、研究それ自体がミュージアムの展示などの仕事に繋がる可能性があるだけでなく、必ずやミュージアムを支える高い意識にも繋がるはずです。

さて、私たちが1年前から強く望んでいた外部有識者による運営協議会がこの3月にやっとスタートしました。NPOからは私が出席しています。この協議会が単なる思い付きを述べ合うシャンシャン委員会ではなく、上記のNPO関連の課題も含めて「基本構想」を実現すべく、地に足の着いた実質のある協議会になることを望んでいますが、皆様もどうか協議会の成り行きを見守ってください。そしてご意見をください。